

祝・卒業 三年生和菓子渡し

令和五年 三月

三年生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。

お菓子の歴史は古く、初めは果物がお菓子でした。稲作が始まると米の粉で団子や餅が作られ、お茶の普及とともに工夫が凝らされ、江戸時代に京菓子として発展しました。

洛北中学校では三年生の一学期に、新しい和菓子のデザインを考え、企画書を作成しました。そして今回、学年で十人の作品を田井弥本舗さんに選んでいただき、四季の和菓子として創っていただきました。

原作者は、次の人たちです。十作のうち二つが彩りを考えて入っています。

目でも味わって、和菓子制作の記念に、ご家族でお祝いください。

和菓子の醍醐味は、暦(二十四節気)に合せて季節を先取りし、やがて咲く花や年中行事に思いを馳せながら、心待ちに食すところにあります。今回の制作では、卒業記念として春待つ卒業式前に、四季の作品として違う季節のものもありますが、本物の和菓子を持ち帰ってもらいます。また、その後も好評でしたら、田井弥本舗さんとご連絡いただければ、今後のお店販売を考えいただけます。

洛北中学校美術科では、生活の中の美術の役割を実感できる、社会に目を向けた課題に取り組んできました。

「京菓子を創る／京都ならではの伝統文化学習から新作和菓子開発、地域店舗販売へ」では、京菓子の歴史を学び、和菓子の銘のあり方を知った後、その経験を基に新作和菓子の企画書を描きました。

商品として社会に通用する和菓子を生み出すとはどういうことなのか、考えの深さが試されました。京都らしさ・洛北らしさや、季節の表現と銘のつけ方、材料の整合性やコスト、製造個数や工程など、夢描いて制作したものが商品になつたときにどう変化したのかも学び取つてもらえれば幸いです。

洛北中学校では、これからも地域を活性化させる授業を創造していきます。
あなたの卒業する母校が、末永く繁栄することを祈念して……。



二十四節気「雨水」 銘「春の予感」

形にこめた思い
「丸くすることで溶け始めた雪を表現した。あんこにすることで雪のワクワク感も出せると思った。」

色にこめた思い
「切ったときにキレイに見えるように、新緑を表現したまつちやあんを入れた。上の水色では、溶けはじめの氷を、上の白あんでは雪の花を表現している。」



二十四節気「小暑」 銘「イチ葉」

形にこめた思い
「自然あふれる京都のシンボルである『竹』イメージした。」

色にこめた思い
「緑に囲まれた京都の落ち着いている雰囲気を表現するために、安らぎを与えるような柳色にした。」



二十四節気「雨水」 銘「歎冬華」

形にこめた思い
「雪に覆われた優しい丸い形に、ふきのとうの芽吹きをポイントにつけた。」

色にこめた思い
「全体的に白く、雪の下から芽や花の色を透けるようにぼかして色をつけた。雪に覆われた冬から春が下からぼこぼこと芽吹いてくる様子。」



二十四節気「大暑」 銘「華火」

形にこめた思い
「パッと花火が咲いた瞬間をイメージした。」

色にこめた思い
「花火の鮮やかな色と咲いてはすぐ消えてしまう儚さを表し、一瞬を大切にしようという思い。」



二十四節気「清明」 銘「春來」

形にこめた思い
「丸みを帯びたかわいらしい桜をイメージした。」

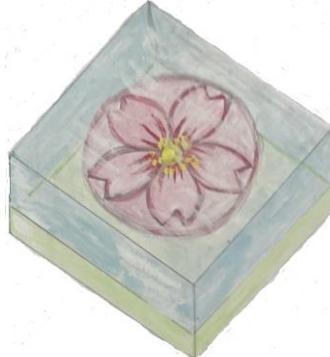
色にこめた思い
「濃すぎない淡いピンク色にし、桜の咲き始めの頃をイメージした。」



二十四節気「長月」 銘「鏡望月」

形にこめた思い
「空に浮かぶ月とは違い水にうつる満月は手の届く、触れるもの」

色にこめた思い
「夏から秋に変わり水も冷えてくる→寒色の青、水にうつる月は空の月より少し色が濃く見える→本来より色の強い山吹色、生き生きとした水草→青がかることを考えて緑



二十四節気「卯月」 銘「春のささやき」

形にこめた思い
「コンパクトで手に取りやすい四角い形にした。」

色にこめた思い
「あざやかな青と緑、少し濃いピンクを入れることで、コントラストをはっきりさせて、春のさわやかさをイメージした。」



二十四節気「立冬」 銘「京の秋」

形にこめた思い
「京都の山を紅葉がやさしくつつみこむような表現をした。」

色にこめた思い
「京都の寺や神社の美しい紅葉を表現いた。」



二十四節気「芒種」 銘「雨時雨」

形にこめた思い
「練りきりで花の形を表現して紫陽花の美しさをだした。」

色にこめた思い
「濃くせず淡い色にすることで時雨をイメージした。」



二十四節気「冬至」 銘「粉雪かかる柊」

形にこめた思い
「3つの実を葉でやさしく包む形にこだわった。」

色にこめた思い
「やさしい赤と緑で雪が降っていてもあたたかさが感じられるようにした。」